

が、来世でのよりよき生に繋がっている。またアマラシリ夫妻は、すべてのものは自分のものではない、という話を幾度もした。「お布施というのは食べ物だとかお金だとかをあげることだけではなくて、そもそも身体もふくむすべてを自分のものと考えず、放棄することなのよ。」そう仏教の冊子を引用し、繰り返し教えてくれた。

そんなアマラシリ夫妻にとって、なかなか手放せないのが、山のように積まれた本であった。家のなかには1室、書庫のような部屋があり、今では誰も出入りしなくなっている。しかし、なかなか捨てられない。

いつか奥さんが、私にプレゼントする本を探し始めたことがあった。奥さんが本棚から1冊の本を取り出す。それを見たビクは「いや、この本は私が誰某から何処何時にもらった本で…」と、なかなか首を縦に振らない。「そんなに執着しないでもいいのに」と奥さんはつぶやく。今度はビクが、1冊もち出す。すると奥さんは「この本はどうしても特別な本で云々…」と話し始める。しまい

は、小競り合いにまでなってしまった。

「これで仏教のことをちゃんと勉強なさい」、そう言って2人から渡されたのは、ブッダの初めての説法が収められた『Dhammacakka-pavattana Sutta(初転法輪経)』だった。イギリスの僧院からスリランカを訪れた著名な僧から、特別に2人が受け取った本だそうで、それこそ2人の身体の一部、大切な書籍である。ペンをもてない2人に代わり、私は「2007.3.29アマラシリ夫妻より」と覚書をした。

小さなことに動揺しがちで、優柔不断な私は、揺るぐことのない信念をもって接しようとする彼らの頑強さに時に圧倒されながらも、日本ではこんなつきあいがどれほどできるだろうかと思う。家族の事情や健康の問題があっても、それぞれ慈善や功德を積み、来世に向かって積極的に生きるひとたちの姿に、私はいつも惹かれ心打たれながら、フィールドでの毎日を過ごしている。

選挙フィーバー

—社会分節の想像と創造—

白石 壮一郎*

疾走する乗り合い自動車にゆられ首都カンパラから4.5時間移動したのち、山麓の小さな商都ムバレに着き、乗り換えのために別の

停留所に歩く。空き地にはおんぼろの日本製ワゴン車が無造作に20台ほど並んでおり、定位置の樹下に停泊する車輛付近に重いザッ

ク2つをおろして一息つく。ここから出る乗り合いが、めざすエルゴン山に入るのだ。14人乗りのせまい車内には人がまだまばらだ。このようすからすれば発車まであと30分はあるだろう。かつて「アフリカの真珠」と称された緑豊かな国ウガンダ。その東端のフィールドの山村に向かうまでのこのルートも、もうすっかり馴染みになった。山麓の町はずれにあるこの停留所ではじめて、首都ではめったに耳にすることのない山地農耕民サビニ(Sabiny)のことに接することになる。さっそくその辺りのサビニ語でしゃべっている男に声をかける。これから向かうフィールドの最新情報を仕入れるわけだ。2001年12月、4回目の現地調査に入るとき、ここで私が話しかけたのは、首都の大学から帰省中のサビニ出身のエリート大学生だった。「地元はどうだ」と私が話しかけると、意外にも返ってきた答えは次のようなものだった。「ああ、ダメだ。みんな政治に狂ってしまっている、まっぷたつだ。」私は彼の言う「政治狂い」「まっぷたつ」の意味を掴みかねた。「選挙だよ」と彼は言った。

オジの立候補

私の到着に先立つこの年3月の現ムセベニ大統領の再選と、6月の国会議員選挙に続き、翌2002年に予定されていた地方評議員の選挙のために、ウガンダの各地は沸いていた。現政権下でのウガンダの地方自治は、「地方評議会(Local Council)制」をとってお

り、中央政府のもとに各県(2002年当時で全国56県)があり、下から村(LC1)、教区(LC2)、サブ・カウンティ(LC3)、カウンティ(LC4)、そして県(LC5)と階層的に地方自治機構が配置されている。私はそれまで選挙の時期に滞在したことはなかったし、選挙がそれほど人びとにとって重要なものだとも思っていなかった。サビニの居住区であるエルゴン山のカプチョルワ県(以下K県)のフィールドの村々ではなにが起こっているのだろうか。そんな思いで村に到着した。

すでに畑のトウモロコシは数ヵ月前、乾季の真っ盛りに収穫されているから、村は見晴らしがよい。いつもどおり、人びとの生活には変わったようすもない。大学生の言葉を思い出させたのは、翌月にあった催しだった。年明けの2002年1月2日、村で私が「父」と呼ぶ居候先のご主人ナココ氏の実弟ブッシェンディッチ氏が地元サブ・カウンティの評議会議員選挙に立候補し、対立候補で現職のチェプシゲイ氏とともに立会演説会をひらいたのである。私の「オジ」にあたるこのブッシェンディッチは、如才ないところがあり、末の息子であるため兄弟のなかでも比較的大きな畑を亡父から相続し、化学肥料を使って栽培しているトウモロコシは毎年かなりの収量になる。加えて、自宅の一部を貯蔵庫にあてトウモロコシの地元仲買もやる。要するにこの地域では例外的な成功者のうちのひとりに数えられているのだ。彼は高学歴である。1980年代にこの地域は度重なる政

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

権交代とそれにとまなう近隣牧畜民からの牛掠奪の激化によって治安が悪化し、人びとの生活は荒廃していた。この時期に教育を受けたのは、別地域に移って通学した数少ない人びとに限られている。1968年生まれの彼は、小学校高学年から高校時代まで、親族を頼って西ケニアに出国して教育を受け、97年に帰国すると地元で結婚して落ち着いた。このオジの突然の立候補を知らされ私は驚いたが、「彼ならばあるいは…」とも思った。

午後3時50分、立会演説会が始まった。老若男女およそ170人もの聴衆が集まっている。2人の候補者がくじ引きで演説の順番を決め、ブッシュ候補（なんとオジは略称で「ブッシュ」と呼ばれる）が先手となり、ケニアで教育を受けたプロフィールで自分の高学歴を強調して、数項目の政策目標（公約）を掲げ、およそ15分間ほどで演説を終了した。2人目は現職チェプシゲイで、ブッシュのように肩に力の入った熱弁調ではなく、周囲にくまなく目を配り、時々ジョークを交えて聴衆を笑わすような余裕もある。概して受けがいい。さすがに現職の貫禄である。2人の演説が終わったのち、質疑の時間に入る。ブッシュ候補は「ずっとケニアにいた人間に、地元のことがわかるのだろうか」という厳しい質問を浴びせられるがなんとかそれに答え、「いったいあなたの任期中になにが変わったのか」と問われた現職は笑顔を崩さずに応じた。ほどなくしてブッシュ候補が私に「何か言うことはないか」と水を向けてきた。スピーチなどなにも用意していなかった私は、しかたなくこのような公の場でいつもやるサ



写真1 演説会の帰路。ブッシュ候補を先頭にしていた行列

ビニ語での自己紹介と挨拶でお茶を濁した。

立会演説会が終わったあとの熱気は、いまでも忘れがたい。現職はそのとき所用で町に向かったが、ブッシュ候補は村にある家にもどったので、帰り道は一緒だ。ブッシュの支援者たちは、行列を作りながら、「火を燃やせ、いつものように（‘Kaarai maata yu kwa’）」「おおチェプシゲイ、燃えて消えちゃった（‘Chepsigai, rai baate,’ 対立候補を盗っ人に見立ててからかう替え歌）」など、いくつかの歌を凱旋歌のごとく大合唱しつつ練り歩いた。普段は冗談ばかり言っている青年がこの行列のなかで、感極まって涙声で絶唱しているのを目にして、私は不思議に思った。なぜこれほどまでに人びとは選挙に熱狂するのだろうか。1月5日の教区一斉投票ののち、9つある村ごとに開票結果が伝令を通して報じられた。われわれの住む村では、181票対183票の僅差でブッシュは惜しくも現職に破れ、支持者たちはおおいに不満がった。結局接戦のすえ、最後の村の開票でブッシュは当選し、支持者たちは狂喜した。

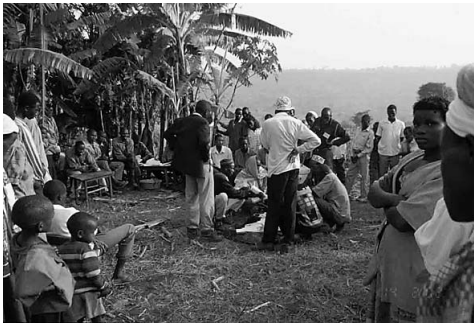


写真2 村での開票風景。村人たちが固唾をのんで結果を待つ

選挙戦の背後にあった政治劇

つづく県評議会議員の選挙までの期間、私は少し注意して人びとの選挙にまつわる言動を気にしてみることにした。道行く私に対しての、「*Chone-anu?* (どこから来た?)」「*Ke-wo-anu?* (どこに行く?)」という人びとのいつもの挨拶に続けて、「*Kewo kwayishet?* (選挙に行ったか?)」と笑いながら言う人が少なくなかった。男たちが昼過ぎにたまり場になっている村の茶店に足を運べば、選挙の話がちらほら聞こえてきた。かれらの「政談」に耳を傾けると、地方評議会の議員選挙戦の背後には、さらに上位のサビニ人政治家どうしの対立があることがわかってきた。

K 県から選出される国会議員は4名。このうちのひとり、ドクター・チェプロットはもっとも名が知られた、いわばサビニの政治ボス的な存在だ。「ドクター」の呼び名のとおり、彼は医者であるらしい。彼を政敵と目しているのが、若手のチェモンゲス氏で、いままで2度国会議員選挙に出馬したが当選を果たしていない。県下の LC1~LC5 各レベ

ルの地方評議会議員候補はみな、このチェプロット／チェモンゲス両氏のどちらかの支持者で2派に分かれているという。そして候補者と同じく投票する側も、この両派にきれいに色分けできるというのだ。私はこころみに村の2人の男性に別々に、この村で世帯を構えているひとりひとりが「どちら派」なのかを聞いてみた。2人が私に教えてくれた色分けは、ほぼ一致していた。しかも、「あその家は、夫がチェモンゲス派だが妻はチェプロット派だ。妻はそれを夫には内緒にしているが…」「かれは以前チェプロット派だったが、いまはチェモンゲス派だ」といったことまで教えてくれた。ここまではっきり知られていることもさることながら、たとえば親族あげて〇〇派だ、というように既存の社会分節によってその色分けが決まってしまうのではないということは私にとって発見だった。たとえば私の父ナココはチェプロット派で、実弟ブッシュはチェモンゲス派だ。

では、停留所で大学生が言ったように、K 県全体が「まっぶたつ」なのだとすると、人びとはどのようにしてどちらの派につくのかを決めるのだろうか。チェモンゲス氏のかつてのサビニの英雄の実息である。彼の父は、ウガンダの英国保護領期に、全国区ではじめて名を知られたサビニの政治家で、「キング (*Kingo*, 英語 *king* が訛った語、ただしサビニには伝統的な王制などない)」の愛称で親しまれた。この「キング」は、エルゴン山域の K 県を創設するのに尽力した人物である。保護領期にサビニの居住区は、山麓に住む農耕民ギス (*Gisu*) と同一の区分 (ギス県) に

編入されていた。サビニはナイロート系、ギスはバンツー系と言語系統が異なり、そのほかに生活文化でも諸々の違いがある。当時の地方行政官のほとんどのポストはギスで占められていたため、サビニは「虐げられた」立場であったという。両者の間ではしばしば武力闘争を含むコンフリクトもあった。そのようななかで、自民族の居住区を県として独立させるという悲願を、1962年にウガンダが英国保護領から独立する直前に達成した立役者が、このチェモンゲスの父だったのである。したがって、この時期のことを知る年長者の多くはチェモンゲス派であろう、という読みがある。かたや、チェプロット氏は、母親がギスである。K県がサビニランドとして「独立」しても、県内には一定のギス人口があり（県人口の約1割）、とくに、県庁の町や県内の小マーケット付近に集中している。これらのギス人口はすべてチェプロット派であろう、という読みもある。

このように、誰を支持するかは自分がサビニかギスカで決まってしまうのならば、K県下で圧倒的人口多数であるサビニに支持される若手のチェモンゲスに有利なように聞こえる。だがチェプロットを支持するのはギス勢力だけではない。チェプロットが現政権下においてサビニ政治家の第一人者となった背景はこうだ。現ムセベニ大統領がクーデターで1986年に政権を奪取するまえにまだ反政府抵抗軍にいたころ、内戦で負傷し、病院に担ぎ込まれた際に手厚く手当てをしてくれたのがほかならぬドクター・チェプロットだった。これを恩義に感じたムセベニは、自分が

大統領に就任してからチェプロットに国会議員の議席を用意したという。これは現大統領とチェプロットとの良好な関係を表す美談としてつとに有名だ。現大統領と親交をもつという評判は強い味方である。

だが、流動的な政局をあらわすエピソードもある。サビニの退役軍人ジミというフィクサーがいて、この男はある時点までチェプロットと懇意だったのだが、その後に鞍替えしてチェモンゲスの支援をするようになった。チェプロットがアメリカ滞在中に購入し、ウガンダのジミのもとに輸送して預かってもらっていた品々をジミが着服し、両者が決裂したからだ。軍部に人脈をもつジミは、同じく軍出身の若手チェモンゲスと組んだ。加えて、チェプロットと大統領との仲も悪くなったとの噂もある。1990年代までウガンダ有数の悪路だったエルゴン山域の道路の舗装事業がチェプロット氏の大統領へのはたらきかけによって始まったのだが、大統領の実弟サリム・サレがこの事業にかかわり、いつ

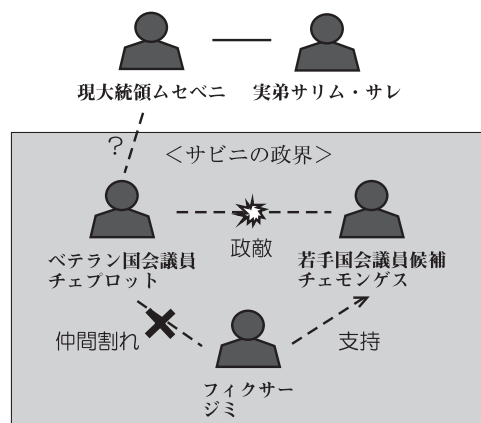


図1 政治劇の登場人物とその関係

のまにか当初チェプロットが大統領と約束した半分の距離に舗装計画が書き換えられていたというのである。だから2001年の大統領選にさいしてムセベニがK県に地方遊説に来たときには、チェプロットは応援演説をしなかったのだ、とささやかれる。そして、道路舗装事業の計画「改変」を後ろから操作しているのが、やはり軍当局とかかわりの深い大統領実弟と昵懇のジミなのだ、と。

社会分節の想像と創造

男たちが村の茶屋で興じている上記のような「政談」は、実在の政治家たちを登場させ、虚実を織り交ぜたストーリーとなっている。どこまでが事実で、どこまでが作り話なのかはわからない。おそらくは断片的な実話だが、サビニの間で焦点化されやすいモチーフ——利益や資源をめぐる競合、それをめぐる葛藤、嫉妬など——に即して翻案され、このような定型のストーリーができあがっていったのだろう。私にはこれが、たんに選挙戦における票読みや情報操作、あるいは「だから自分は〇〇候補を支持するのだ」といった正統性を争うための言説であるとは思えなかった。ましてこの選挙熱を一足飛びに、「農村の人びとの熱心な国家政治への参与」などと考えることもできない。ただ、このように語られる政治劇が、村での「まっぶたつ」の状況を創る想像力をあたえていることはたしかである。そして、選挙そのものだけにでなく、生活のところどころにこの「まっぶたつ」の分節がもちこまれる。

たとえば、このような男たちの「政談」の

たまり場となったのは村の茶屋だが、選挙期間中にチェプロット／チェモンゲス支持者たちは教区内のそれぞれ別の店を縄張りになっていた。また、当時女性を中心にこれまでにはない大規模な互助講である「グループ講」の活動が勃興していた。積立金でトタン屋根の「モダンな」家屋を新築する資材を購入するという趣旨でおおいに盛り上がりを見せていたこの「グループ講」は、いくつかの村の女性を中心に2つ組織されていたが、それらはくだんの2人の支持者どうしの連帯グループという側面をもっていたことがわかった。じっさいに、かれらの間にどれほどの緊張があったのかはわからない。前述のとおり近隣の誰がどちら派だということは知れ渡ってはいるがそれが庭先で話題になるわけではない。ただ、ある人の行ない——たとえばどの互助講に属しているか、どちらの茶屋に行くのか、誰と仲がいいのか、など——がその人がどちら派だという表現になっているのだ。かれらはそうした状況を面白がっていたようにみえる。かれらにとっては、この状況下で「どちらの候補者を、なぜ支持するのか？」よりも、「どちらかにつくこと」が重要だったのではないだろうか。

いくらかきな臭い話もないわけではない。ある候補を支持する青年が同じ候補の支持者の世帯を石鹼や砂糖などの「実弾」を配りながら訪問する場面に出くわしたことも数度ある。また、投票日が迫った夕暮れ時に、ある青年が村の小道に潜伏していた数名から投石で襲撃されたこともあったし、県庁の町では対立候補の支持者どうしの抗争からある男



写真3 県評議員の「選挙宣伝カー」に満載の支持者たち（県庁の町で）

が「まるでヤギを屠殺するように」殺された。かれらに親しみやすいかたちに書き直された政治劇。そこに書き込まれた人間どうしの葛藤や嫉妬、憎悪、それにもとづく抗争などが、かれらの社会の現実に飛び火しても不思議ではない。選挙の熱狂のこうした側面をどう考えればいいのかは、私にはまだわからない。ただ私が注目したいのは、人びとは現実の地方政治のもとでかれらの日常がどう変わるかより、選挙にまつわる一連の政治劇を、あらたな社会分節の想像の資源として動員し、そのフィクショナルな分節を実際の日常生活のなかにもち込んで可視化し、演ずることをかれら自身が楽しんでいる、という点なのである。

前半で紹介した私のオジの立会演説会でのこと。閉会になった直後、フィールドの村に住むある青年が私のもとにやってきて、「お前はどっちにつくんだ」と問うた。彼自身はブッシュ候補を支持している。そのとき私は中立を気取って、「どちらでも」と答え、「そもそもおれには投票権がない」と言い添えた。場の熱気と緊張とにいささか興奮気味だったこの青年は、即座に興ざめ顔で吐き捨てるようにつぶやいた。「なんと役立たずなお前！」一瞬私はムッとしたが、彼の言葉は的を射ている。たしかに、ふだんはナココの息子やブッシュのオイとして振る舞いおおせているとしても、この状況のなかで、私はなんの意味もない存在だった。私は父ナココが、自分の支持する国会議員とは反対陣営に与する実弟ブッシュに投票したのかどうかは知らない。しかし、ブッシュの当選した晩、父は黙ってニワトリをつぶし、一家の夕食は賑わった。その後の県評議員選挙で、こんどは父の支持する陣営の候補が当選したのだが、その晩もまた父は黙ってニワトリをつぶした。われわれは選挙のおかげで、二度もおいしいスープにありつけることになったのだった。

ボルネオの豊かな動物世界

加 藤 裕 美*

森の中を歩きつづけて2時間近くなる。周囲にはまったくひと気がなく、聞こえてく